

このように楽しんで話し合うことこそ、前項で述べた国際的プレイヤーになるためにも、本項で述べた大気科学という種目の発展のためにも、第一段階としてまず必要なだと筆者は信じている。論旨の飛躍を恐れずに言えば、日本人に独創性がないというのは間違いで、独創性溢れる成果を楽しんで話す努力が足りないのだと思う。幸い、筆者と親しくして下さる少し年長の「団塊の世代」前後の日本人には、楽しんで話す名人が多々おられる。今回の出席者では、本報告の惑星大気関係では小山氏、また別稿の中層大気関係では京大超高層の深尾昌

一郎氏に学ばせて頂く所が大であった。最後に、筆者の COSPAR 総会出席は科研費 (代表: 松野太郎東大教授) による国際共同研究の機会を利用したことを記し、関係各位に深甚の謝意を表する。

文献

廣田 勇・山中大学, 1988: ヘルシンキ COSPAR 中層大気シンポジウムの報告, 天気, 35, 709-713.

山中大学, 1988: 金星下層大気浮遊気球計画について, 天気, 35, 391-393.

==== 会員の広場 ====

休憩 = 研究交流時間をもっと多くとれるのなら

丸山 健人*

今年春季大会において、口頭発表の時間を1件当たり講演5分、質疑2分にする方式が試行されるとのことです。私は、休憩時間をもっと多くとれるのなら賛成です。休憩なしに3時間以上にわたってつづくこともあった今までの大会は、時に苦痛でさえありました。この試

行の成否も休憩時間がどれくらいとれるかで決まってくると思います。

それに、休憩時間は単に休憩するだけでなく、交流の時間でもあります。発表時間が短くなった分、それだけ研究交流がすすみ、参加者にとって刺激の多い大会となることを期待します。

* Taketo Maruyama, 気象研究所.



松井 健・小川 肇 編著

『日本の風土』

平凡社, 1987年

A 4版 110頁 3,800円

本書はカラーシリーズ・日本の自然10巻のうちの第2巻である。編集にあたった松井氏は、わが国を代表する土壌地理学者で、小川氏は中堅の気候学者、著者としては新進気鋭の気候学者の松本淳氏と、植物地理学者の小泉武栄氏が分担執筆をしている。

章立ては、多彩な日本の気候。日本の六季。日本の気候をきめるもの。水と緑と土。過去の気候をたどる。新しい風土をもとめて。6章から成る。カラーシリーズと

銘打つだけあって、随所に多数の美しいカラー写真と図表を配し、平易な文章で解説がされている。図表の出典は専門書や論文で、見やすいようカラー印刷になっているが、トレースは原著に忠実である。巻末に文献リストと索引がついているので、学校教育にあたる教員の参考書や教養書としては手頃な本である。

私の個人的な興味からいうと、日本の植物や土壌を要領よくまとめてある第4章と、江戸時代の小氷期から順次時代を遡って12~13万年前の最終間氷期までの日本の気候と自然環境を述べた第5章がとくに面白かった。

中・高校の学校図書館などにそなえるとよいように思われる。

(河村 武)